重修真書太閤記

初編 六

へ13
459
6

柳庵栗原校訂
重修
眞書太閤記初編全十冊
東都[illegible]堂

特 へ13
門 類 叢
號 459
巻 6

消 禅 森

重修眞書太閤記初編巻之十六

織田北畠合戰の事
并木下藤吉郎佐屋川先陣乃事

木下藤吉郎高吉信長の御前ゝ於て諸老臣歴々列座せしふも憚らず軍の勝負進退乃理を述て合戰を勸むる利害分明ふして必勝の機發顯然たり信長元来進んで戰ちんを殊思ひしかば藤吉郎が策をよしとして大ふ悦び諸将に向ひ汝等よく聞べし藤吉郎が説ところ大器よりして且我本意ふ叶へり我初陣の時より危きを犯して身を顧みず真先ゝ進んで自身敵を討しこと數をしらずされ血氣

同攻會印

の勇をさげすむ者も有べけれども合戦の道を左ろあらば今藤吉郎が申如く軍ハまづ氣の前後によるものなり今我心決したれバはやく川を押渡して戦ふべしと下知せらる

呉子に三軍れ衆百萬の師張設輕重一人にあり是を氣機といふこれあり又三軍乃災狐疑に生ずといふも此佐屋川合戦の條と合せ考ふべし

柴田以下の諸将木下を憎しと思ふが故に更に進みて戦んときバ柴田勝家木下に向ひ汝辨舌利口にして危き合戦を勧め奉り味方の軍兵を必死の地に赴かしめんとし且敵に伏勢ありといふ其の證ありや實に勝べき道理あらバ何とそれを

拒むべきや伏勢の實否すみやかに申べし當家普代の老臣智勇すぐれし諸将さへ敵の軍略伏勢の有無誰一人知る者なきに汝一人何として知けるや覺束なしといふ藤吉郎聞て實も柴田殿の御疑ひもさることながら覺えバ歴々の老臣たちをさし置新参乃某が申條さこそあやぶみ玉ふらめ某とても天眼通も得ず

翻譯名義集に眼に五種あり一ハ肉眼二ハ天眼三ハ慧眼四ハ法眼五ハ佛眼なり肉眼ハ淨く三千大千世界をみる天眼ハ淨く十方如恒河沙等諸佛世界中衆生死此生彼をみるといふ

居ながら敵の實否をしるべき様なし然れども輕き身乃

一徳によりて直にその實を探り知りしは其の故ハ我君此地へ著陣ましましけるに敵の勢を見積りしに存の外に小勢なりしハ故こそあらんと存某一人川上よりうち渡り敵地に赴き所々をめぐりて廻り伺ひしに川だされ上下に多くの勢を伏らせて本陣をうかゞひしにおよそ五千余騎なるを過まじくいその本陣より一里計へだてゝ爰にも又伏兵ありそれよりこなた十町ばかりを隔てゝ印の木をたてゝあり是ハ合圖の設にて正面の兵わざとまけて敗走しけるところ伏勢起り味方を落合ん時大返しに返し合せ三方より寄合て討んと謀りしものとおぼえ候但此敵を打破らんとおもはゞ味方五千の勢一度に川を打渡し三手に分て一手ハ我君二千計

の御勢にて正面の敵に打合のまねしさせて戦ひまけし風情して敵偽り引退らば味方備をたてゝ静々と追討ちなすべし敵ハ味方の備を崩さんと打負〳〵引退く体し敵の勢印乃木まで退きつんとおもふ時無二無三に責かゝらんをまちて敵の方便相違して相圖をあはさず暇あらずなりなん然ばそのはじめハ偽りて引退きしも今ハ實に敗軍して立直るべき手だてなく終にハ捴崩なるべしその折りハ漸一里ばかりさきに伏たる兵もこの敗軍に氣をのまれて中々援ふ術もなく我さき逃に逃べし其の時味方三千の兵を二手にわけ一千五百づゝ引わけて川の上下に伏たる勢に向かふて逆寄せにおしよせ鉄炮打かけ短兵急に責かゝらバ伏勢とも進退度を失ひてたちまちに敗軍を

べしかくてハ味方の勝利眼前にありとなぞ信長いはく
勇ミ悦び天晴ふしぎの藤吉郎なるよしも伺ひ知しとの
かゝる汝等も我をおもんじて嫉妬の心をとゞめて藤吉郎が謀
に随ふべし再應の異見に及ぶ迄もなしと有しかバ藤吉郎
とかく掠てより贔屓をし輩ハ才智感ずるに餘あり奇代の
名士なると褒るあり又偏執の心より不快に思ふ輩ハ理を
やぶるに及ばずしてなかなか下知に從ひしかバ信長三方乃
手分を定められまづ一方ハ柴田權六勝家を大將として
坂井右近將監中原小市郎佐々木隼人をそへて千五百餘
騎勢州の伏勢安保若狹守が手にかゝるべしと定め一方ハ佐久
間右衛門佐信盛を大將として遠山甚太郎林藤八服部小平

太と先として千五百余騎勢州の伏兵礒田弥之助が手にかゝる
べしと定め残る二千余騎をば信長大將として森三左衛門可
成池田勝三郎信輝毛利新助秀詮なンど相從へりこれハ勢
州の大將左少將具房朝臣の陣に責かゝるべしとぞ但その日ハ
評定に日たけ既に未の下刻にもなりたれバ明日早天に川を
渡るべしと定められ諸軍勢一同にその用意をなしをりたり
然るにその夜藤吉郎密に池田勝三郎に就て言上したる様
明日の軍正面ハ必勝の氣顕はれ候へども左右の伏兵にむかふ人々
の勢今すこし不足に候へバ能々取鎮めて合戦あるべき様御下
知ありたしと子細とはくして述たり是ハ伏兵にむかふ柴田
佐久間藤吉郎と不快なれバ油断して誤あらんを氣遣ふ

さるほど信長ハかくてそれらのことを推察しまひしかバ既に打出んとありし其時柴田佐久間をちかく召よせ具房朝臣を小児なりその手の兵何ほどのことあるべきされども時に取ての大将なれバ某駈むかふて戦ふべしただし伏勢のそのく起らん時こそ大事なるぞよく／＼力を竭して防てたべその隙に具房朝臣を追討して我身も一所に打合を御邊等と共に引つつんで責かからバ伊勢武者を佐屋川へ追つめて皆殺しにすべし今日の合戦ハ後陣こそ大事なれおのおのしかと心得よと伊勢武者にはかまはれると宣ひもて馬を引よせゆらりと打のり駈出しゆへバ柴田佐久間言葉をそろへ何條さるゝ事あるべき戦場にはゞかる骨を砕き力を竭すこそ勇士の常には小勢と

かく大勢に打合てこそ手柄のほども世に志らるゝ事もひとつなれ御心安くおぼしめし給へと莞尓と笑ふておのおの馬に打のり持場持場へむかふ行信長今ハ心安しいざ川を渡さんと打立給ひ木下藤吉郎をこのころハ甲冑のおどしちぎれくるしげにて志かも歩行武士の中にまじりてありしかバ信長心中にふかく歎息し智謀抜群なるものなれども新参といひ小身なればバ甲冑さへかくの如しいまだ馬をもゆるされざれバ歩行武者乃列にてありしを廻ることのかたさに彼が今日の働をすゝめんやとおぼされしかバそのよろひを着この馬にのりて今日の先陣はとめよや藤吉とて紺糸の鎧におほどし毛の甲九尺の手鎗に夕顔といふ馬をさへ賜りけれバ藤吉郎なのめならずいさま

ばゝん昨夜百姓を案内者として川の浅瀬を見置たれバ
いざや先陣仕らん進めよ人〻とてまつ先に乗出しける
高臺寺ハ紺糸の胴丸乃裾に窠の紋付て熊の皮にて包
ミしあり佐屋川先陣の時信長より賜ハりし所と云
九尺の手鎗と云ハ甲州武士の詞に侍鎗と云尾州にても
志か云とぞ是呉子にいはゆる短戟一丈二尺と云ものなり
呉子の一丈二尺ハ日本曲尺の九尺一寸余に當る木下に馬并
甲冑を賜ハること菅谷九右衛門を以て與へられしと云説も
あれども高臺寺の鎧乃説にハ信長自ら與へられしと云り
敵方にハ昨日信長出張ありしかバ定めて進ミ来らんとまち
設けし處静まりかへりてその沙汰なし今日ハはや三日になり

ぬるに何とて尾張武士ハおくれしやと夜のいまだ明なそばる
ほどより川ぎハに先手の足軽を出しのゝしり笑ハせけれども
織田家の侍更にすゝまんともせず大川を前にあてゝ睨ミ合て
ぞ居たりける伊勢武者も川を隔てゝせり合まで心をゆるし
詞たゝかひをのミして時刻残過しける間に藤吉郎が案
内にくハしきか乃川上より馬を打入浪を蹴たてゝ歩ませ少し
深き處をバ手綱をゆるして泳るもあれや川の半過ぐるを
見て信長諸士を見かへし猿に継けや侍ども小猿一人に高名
させる若武者ども我をとらせんものども続けとれ猿ハ小兵なれ
ども大膽不敵のものなりと大音に下知しておめいて瀬に打入
をゝみなへバ誰なりとも一人もとゞまるべき五千余騎一度にのり入て一文

字に打わたし向の岸にのり上るやいなや鬨の聲をあげつゝいせ勢に切てかゝる北畠殿爰より敵のわたさんとハ思ひ設ぬことなれバ防ぐ術の相違して鉄炮少く打掛しまでにて右往左往と散乱をかゝる處へ木下藤吉郎かの夕顔に打のり九尺の手鎗を打ふり真一文字に突かゝる跡より續て尾張の先手ハ池田勝三郎信輝森三左衛門可成いづれも究竟の若武者大将におくれじとかけたりけり

永禄二年四月十九日合戰の場ハ伊勢桑名郡名江南江梯塚の間といへり

伊勢武者これに辟易して立足もどろに見ゆる處へ得たりと鎗を突入て縦横自在に振舞バ敵いよいよあわてふためき引色に

のぞみてありしと見て鳥屋尾森本なとを敗らはてハかなたゞよくこらへよとの共と進め勧まきそくのに合うてたちまちしを我もとバ時分ハよきぞと偽りすゝけて敗走をはまとども伏勢のをと尾州方にてハ用心しうりしかば柴田佐久間の両将川の上下へ押寄て採にのんて責付たりしほどにたちまちさ軍もせで敗軍しけまとバ國司の本陣尾州勢に突立られ既に敗走んとするとも知をされバ定めてく尾州勢の後より引包んで戦かこハ思もよらバ信長國司を追懸て無二無三に切かゝるこそ木下池田にむかひたるをば静かによせるへ敵定めて大返しに返るべし返さば短兵急に責るべし印の木の見ゆるまでいかにもゆるく追をせるへと味方をいさめて追

掛る國司の勢ハいまだ我伏勢ハをかうりつゝ尾州勢の跡を喰留て戦ふべしとやゝと鳥屋尾森本聲を限りに下知すれども多勢の引たつる事なれバ耳にも聞入ずして敗軍に抑池田と森とハ元より木下を凡人ならぬとおもひしが藤吉郎がたばかることを信じてその約束にしたがひ柴田と佐久間ハはじめより木下をいぶせきものにおもひしを彼がいふほどのことハあるまじと過言ありといひのゝしりしをされども今日ハ誠に藤吉郎が言葉のごとく味方十分の勝利を得我身も伏勢を打破りて心地よしとおもひながら猶ますく彼が出頭せんことを嫉みて更に快からぬことなれバ終に池田と森の子孫ハ豊臣家の時に繁昌し柴田と佐久間ハ

仇となりその家國をほろぼさるゝ因縁なりき

勢州方摠敗軍の事
并福富平左衛門金龍乃笄を失ふ事

池田勝三郎信輝森三左衛門可成ハ木下が告ると信じて國司の勢をゆるやかに追かけてみだりに迫らず然るに木下をしるしや印の木乃見えざるぞかなしく伊勢武者引返し戦ひしその心して追かけよやと池田森の両將に相圖をなせば両將おのく備を立なをし隊伍をさだめ追をとゞむるを案ぜずして北畠勢大返しに返し合たりされども味方の手配厳重なれバ打ども切ども更にすきまもなし北畠勢ちからなく戦ひつゝ引退けバ尾州勢急に追かけ鎗ぶすまを作りて突かゝり北畠

勢又もつきり負て引退くかくなると段々ふりて尾州勢を
引入るるとや深く今は伏勢を起りてん爰まて一揉もめ
やとて馬のかしらを立直をは木下時分はよきぞと告けるに
より森池田面もふりぞ突かかれは北畠勢案に相違し伏兵
もいかにぞしやらんと疑ひあるものも多く手元ゆるみて見え
し処へ尾張武者潮の涌ごとく鬨の聲を揚て揉立たり木下
真先に進めば信長纔いそうけ来ぶまうくするかどる合圖の時
刻を延しは伏勢の方便相違して尾州武者に敗られまとし
あらんと氣をくまししく今までいつわり迯しものも實に
我先にと逃さりしかば一支もはえずぞ神戸をさして落うせ
たり鳥屋尾森本味方をまとめ尾州勢は小勢なるぞ〳〵とや

かくを弓箭のちぢをもれやとのごもと下知をを共大勢の
亂を立たる曲なれば耳にも聞入ぞ心々に迯失たり大将具房
朝臣は幼稚なるをばいふまたしれ
流布本に身體ふとりて馬にも自由にのり得ぞと見え
たり然れども此時いまだ八歳なれば肥太乃故に敗軍せ
しにあらず
既に尾州勢に追はれも馬は疲れ撲ふ兵はなし今や
いかにと思ふ処へ鳥屋尾森本返し来り必死になりて敵を追
拂ひからくして具房朝臣を助けたりあれ此時伏勢の術
相違せずば尾州勢五千餘騎一人ものがるものはあるまじきに
北畠家の傾く運のなるしとて木下一人か謀に破られて伊勢

武者たちまちに敗軍に織田勢透間もなく追来り勝三郎
信輝大音上て國司ながく留りて聞食されよ信長
當國へ馬を入しを一度もゆるさぬに北畠どの大軍を發して
尾州へ乱入ありし給ひ信長が領地を切取なんとハ何ごとぞ
信長血氣にはやるものとさげすみ給ひ伏勢を川の上下に
置て前後より包うたんとたくみ給ひしを先達て伺ひ
知て伏勢をバ打ちや残らず切ちらしたりさてそれへ逃するハ
具房朝臣と見奉るなれバ大河内へ参向して父御所に見参し
何とて尾張を切取んとはかりまふぞやその本意を尋ね申べし
このこと疾や引かへして父御所にまうさせ給へとよばゝりて手いたく
責たりけれハ具房朝臣を介抱してまづ五六百余騎にて

大河内をさして逃られしかば路のほど五六里の間に弓箭太刀
刀鑓長刀ハいふに及ばず鎧甲をはじめ數代持傳へられし伊勢
武者の重寶ハ此時に失ひ尾張武者ハおもひの外に德付たり
信長まづ先勢を呼かへし長追をせざれバ後陣の味方を待そろへ
一手になりて備を固めさせ息を繼や者どもと馬印を立らせ
しかバ追くに及て集り勝軍を祝して居り然るに柴田佐久間ハ各千
五百余騎を率ひて伏勢に向ひしが不意を討ハ勇士のせざる処と
て安保若狭守が伏たる処へ押寄鬨の聲を揚て責かゝる安保ハ
信長の川を渡るを見て今や合圖の狼煙を上る合圖次第に打
立やと用意して待期をまてども音もせざりけれバ此方より打立んか
いかにせましと思案取てある処へおもひもよらぬ柴田權六あれはそ

尾張にて鬼柴田とよばるゝものなれ油断なせそと下知して抜き
合せて戦んとすれバ勝家真先にすゝミ三尺八寸の太刀を真向に
ふりかざし拝ミ打に切て廻るその勢荒神の如くなれバ面を向べき
様もなき安保が手の者八千余騎も柴田が勢に切まくられ思の外
に散乱を柴田が手の者千五百余騎前後左右にかけ破りかけ入
心のまゝに突ふせ切ふせ勢ありとも見えたりけり安保ハ
味方の謀漏たりとおもひしかバはやくハ具房の旗本も心元なしと柴
田とはしらずて旗本の勢と一所になるべしと引色になる柴田が手
に敵をうつこと五百余級とかや佐久間信盛ハ磯田が陣におし寄
散々に攻たりしかバ磯田もかなはず敗走し大河内をさして引去り
けり佐久間柴田おもひのまゝに分捕し信長の本陣に参向して

軍の次第を言上す信長大に悦喜ありて諸将の勲功を賞美し
早く川を渡して一まづ清洲へ帰るべしたゞし暫時の用心に防禦の
兵をのこさるべしとて福富平左衛門に八百餘騎を添て佐屋
川の邊に陣を取木下藤吉郎これに差そへらる然るに福富平左門
秘蔵しける金龍の笄を盗れしとのありさ満ゝに詮議されども
更にしることのなし

印本太閤記に永禄六年墨の股陣の時乃事とれ

陣中にてのことゝいひ外より人の入るべき筈なけれバ味方の兵士の内
にあるべしと心を付るに木下藤吉郎ハ眼ざしするどく盗賊めきしに
幼ける時しまなれしことも有ときけバ彼なるんと云ことの多し
平左衛門實も尤なりとおもひ藤吉郎をそろめ組下なるものを

招き集め我失ひし金龍の笄ハ故備後守殿より賜りしもの
にて秘蔵なす君恩と云大切なる品なりたゞし此品盗まれし人
大形ならぬ咎なれども品だに返さバ云ぶんなし人にハ出来心と
いふことも有ものなるや笄を返さバ返しなバ我も又笄ほどの
報ひをなすべしなり又遅くせば我引捕へて拷問せんと思ふ
なりされども然しなバある人の命を絶るも至るべし陣中も陣中による
べし他國まではさとるまじ我心づくの如く早く持来るもよかし迯る
とも我迯さじ我見る眼ハ違ハじと藤吉郎ハようそくおもひしに
すかしつるしたれバ藤吉郎心中におかしき様平左エ門我を盗人と思ふ
條無念の次第なれそれのとなるぞ小児を欺くごとき詞を以て我我をたはか
とかくさもあらしほりなバ盗人の穿鑿をなさでハ汚名ハ雪ぎがたし

さらバ彼盗人を引捕えんと思ひ心中に決着し態とそらしらぬ風情にて
居たり平左エ門ハさこそやがて欺きすかしつれバ今夜にもなほ持来る
ならんと心におもひて皆々退散させたり藤吉郎よく陣中の沙汰
ときゝしに平左エ門が槍の中間藤吉郎が盗しならんと告しときゝてさて
ハ彼ならんとハおもへども證據なければせんかたなく翌日夜をこめて陣中
をしのび出津島にいたり堀田孫右エ門と云豪富の家にいたり主に對
面して金龍の笄を持来り金かりんといふものあらバしらせよと云に未だ
品を持来りし者なしと云ければしばらく休息して待べしと云孫右
衛門また津島の質屋共へそのこと残告て待居たり
津島の堀田孫右エ門正貞入道道悦と云ハ堀田兵部大夫正純の孫
加賀守正道の長子なり正貞入道貨殖の術に長じたれバ金銀多く

貯しによりて織田家の諸士ハ云ふ及ばず此あたりのものども多く
此家に質して金銭をかるといへり
さうして其次の朝一人の男孫右エ門が家に来り金龍の笄を出して
青銅五貫文をかさんと云孫右エ門取て是をみるに木下が頼みし品に
よく似たれバ密に木下に示す木下よくよく是をみるに福富が笄なり
しかバ大に悦び其笄を持て躍り出件の男を取て押へまづ縄をかけて
その面をみれバ福富が籠の中間なり藤吉郎大に悦び扨こそと引
立むきたて陣所へ立帰りけり
此頃の銭五貫文ハ米大抵六石餘と交易すべし六石余ハ量に相違あれバ
今の量にて五石余と知べし金龍の笄大かた祐乗宗乘の作なるべし

重修眞書太閤記初編巻之十六終

重修眞書太閤記初編巻之十七

福富平左衛門勘氣を蒙る事
并木下藤吉郎御加増残賜る事

木下藤吉郎盗賊の汚名を得て心中に怒るといへども思慮
深くして色にも出さず津島に至り智計を以てその盗人を
捕へ笄を奪返し悦び勇みて佐屋川の陣處へ帰りけるに
福富平左衛門ハ一圖に藤吉郎を盗人なりと思ひ夜前の如
く言葉を工みにして謎のごとくたぶらかしかば定めて持来て
返さんと心待に待しかども終にその夜ハ沙汰もなく
夜明て藤吉郎陣中に居ざる由をきゝ心當りの處々を尋

されども在處もなきゆゑにより扨は盗まれしかと其の顯るゝを恐れて逃しけるか又は手延になりて取逃されしことの残念なるに夜前引捕へて拷問をもすべかりしを猶豫せしことのくやしさよ然しながら此旨言上して急度行衛を尋ねんものと早く信長の本陣に到り木下藤吉郎出奔仕りて行衛しれざれば尤もかと仕りたる證據はなくはべれども某金龍の笄を失ひはべしかど夜前兵士を集め品さへ返しなば相應の謝物を送る由心得違ひて取りくせし罪を問究るに不及とありしに藤吉郎もその座にありて聞ゐたりしがそのなかるがありしは彼が所為にやはべらん御詮議なし被下候へと言上すて信長きこしめし甚以不審をなし藤吉郎召されて

の品に目を懸て盗取一身を誤るべき者にあらず是には子細ぞあらんと思召されしかども差當り藤吉郎居合ざりしかとなれば先づ福富が願の通り吟味のことはその筋の奉行に申付べきなりと下知ありしかば平左衛門は悦びて己が陣処へ立かへる引違ひて池田勝三郎信輝信長の御前へ出て申すは今朝藤吉郎はさる用事のゆゑより津島まで罷越申度由なりしは半日おそくとも今日中まで歸陣仕るべし必ず子細のゆゑは組頭福富へは申さざりけり上より御尋もはべらばよろしく言上なしくださるべしと申てゆゑと言上ければ信長きこしめしさありけんいずれにも藤吉郎が安否今少し待たば分るべしその上にて奉行へは仰らるべしとて待せらるゝ程もなく

藤吉郎あやしき男をいましめて信長の本陣へ参上し池田
勝三郎を奏者として言上しけるやう福富平左衛門故殿より
拝領仕りたる金龍の笄を失ひ候て種々尋ね候へども何者か
藤吉郎が盗みてありとや申せしを平左衛門まさしく心得某が貧
窮なる不自由がちなるを以て盗みしならんと諸兵士を
集めてさ洗ぐにあざむきては其場にて打果しては安くは候へ
ども盗と申汚名の雪め様なくは間思案仕ゆべく候ひさきに心
付しそのはにより津島に罷越斯々と謀りて仕合よく盗
人を捕得て笄をも取かへしては候へども上の御沙汰として
盗人を福富につけし某を疑ひし心ともなるべし且藤吉郎
が盗みしにあらざることを陣中に披露ありて賜わりたく候や

とやけ勝三郎手を拍て大に悦びいしくも計らひものの
かなは邊陣中を立のかれし故平左衛門いかにも疑ひて既に
御前へ言上しつれども上には盗まれへき藤吉郎にあらざれば
故こそなりめと宣ひられいそぎ奉行へ穿鑿をと仰付
られぞもやく言上をべしと云つつ本陣へ参上し藤吉郎
只今罷帰りて候今朝申上しごとく津島へ罷越心當りを探
りぬへばたらして盗人をも捕得笄をも奪返してはとや信長
さもあらんなどめより笄など盗むべき藤吉郎ならずと思
ひはるところその盗人よく吟味せよと勝三郎に仰らるるにより
勝三郎嚴重に責問ければありのままに白状したり然も福富が
朧の中間にて藤吉郎を盗人とせんとおもひしことの元すゑを

つぶさにのべて命ばかりを許させ給へと哀をこめて請ふて泣ふしたり勝三郎福富を呼よせ件の笄を示し其方の失ひし品は是なるかといふに平左衛門とくと見ていかにも相違なければはやくも捕へられしを上の御威光の及ぶ処なりとおもしられ時に勝三郎その盗賊をも其方に下さるべしとの上意なりと云平左衛門定めて藤吉郎ならんとおもひ居処へ盗賊を引立来たりよく見ければ平左衛門が籠の中間なり福富案に相違しあきれはててぞ居たりけるその時勝三郎盗賊の白状口書を平左衛門に渡しければ平左衛門読畢て赤面し首をたれてかしこまる勝三郎声高くいふに福富藤吉郎を疑ひしとは後悔するやいなやと責ければ福富いよいよ恐れ入て言葉

なし時に本陣より福富に参上すべき由を仰られければ福富赤面ながら御前へ出ければ信長いつものごとく会釈ありて宣ひけるやうそもそも武士の刀を佩ることは何の用にてなるぞと問ふに平左衛門心得ぬ御訊ながら答へいはわかりなんと思ひさんは刀は武士の魂とや如くなれを以て身をまもるとかや申ければやと信長打笑ひおのれもそれを志りつるか武士の魂とて佩る刀の笄を盗まれしも魂をぬすまれしものと云べし身をまもる刀にさしたる笄をぬすまるるも知らざりしは身をまもる心にも怠りしと志らるる己が中間の盗みしをば思はずして却て藤吉郎を疑ひつることを浅ましき心と云べし衆座の中にて種々にあざむかすり悪名を負せ

然も證據もなきことを訴出し條幾重にもゆるしがたし
藤吉郎智謀ありて不日にその本人を捕たれバ藤吉郎が
身にいさゝかもあやまりなし是其方藤吉郎が智に及ざる処
なりそのもの魂を盗まれて恥とおもはず却て人を疑ふ汝が
如きものハ終にハ寐首をもかゝれ候べしされど武士道に暗
きものハ信長が家にさし置がたしとくや立さりて武者修行
なりとも致しうつけ者の名を雪ぐべしそれ追立よ若者共と怒り
聲にのゝしりたまひて帷幕の内へ入たまへバ平左衛門大に恐怖し
まづ本陣を去りぞき池田が陣處に入てことの始末をのべ藤吉郎
を疑ひしことの誤り弁を奪られし愚さいふも恥入てゆくへども此
まゝにて尾州を追出されてゆく何方にか身を宿しけべき唯路

頭に餓死せんのことなくば取成を以て曲て御免を蒙りたくばと
中勝三郎聞ていかにも尤のことなれども殿のかく怒らせたまひし
時急に恩ひ宥したまはず今彼是とおよび言中さば猶々怒
りを増てその詮なかるべし時節を待て我々詫語をもふし
あぐべしと云により平左衛門せんかたなくさらバ後日の御取計ひを
待申べしとて陣を拂て浪人せり
印本太閤記に福富平左衛門浪人せしことをいへり然ども其
美濃國墨股に平左衛門浪人して住しと云地あり其子孫
もありてたしかなる由いへバさることも有しにや
さて信長佐屋川の陣をはらふて清洲へ凱陣ありて此度勲
功の諸士へそれぞれ恩賞ありけるなかに木下藤吉郎を呼出伊勢

武者の計策を探り出し合戦をすゝめおのが圖に敵を打破
りたること是藤吉郎が功といひつべし加之笠寺の砦を取し
も全く其方の胸中に出て我國の勢を佐けしと抜群の奉公
といひつべし功勞あれば賞行るべし先日預り置し百貫の知行に
加増して五百貫となさるべし且織田家の老臣木下雅樂頭が
家を繼て老臣の列に加はり新參の辱をまぬがれ評定の席に
列座すべき旨詔れしかば直にすべしと宣ひせられける
中村を改めて木下となしつるを此時にあらだ松下乃公を
去といふも時に取ての智略にて元より木下といふ氏の縁ありし
を追ふにのがるが如し五百貫の知行ハ大なる今の四百斛なり
に當れば千石計と知べし木下雅樂頭といふハ近江源氏高島

の庶流にて右京進泰範の孫源四郎顯氏の男高範初め
右京進といふ後に雅樂頭といふ雅樂介範信半右衛門高常
金右衛門範常の父なり
藤吉郎今日より織田家老臣の列に加はり五百貫の知行を賜はり
て家にかへれば妻ハいふに及ばず舅の藤井又右衛門を初め藤吉郎
が立身を待しもの悦ぶことかぎりなし小身といひ新參といひ
今まで藤吉郎をかろしめ侮りしものも俄にをそれて會釋
をなせぞをかしき
侍の新參古參を論ずることそのはじめ定かならず祖ども
諸衛府及び近衛に重代譜第を貴ふたとへバ父祖代々衛府
近衛に直なるを重代の兵士といふ某の弟某の二男三男を

以て衛府に直さるゝと譜第の侍と云源平の勇士おの〳〵其所管に随ふを重代相傳と云所管を替をバ新參と云新參を今參とも云證文ハくだ〳〵しけれバ云ハず甲斐の武田の家にてハ何の先方衆と云譜第の侍と列を同じく
せバ當時いづまでも志るあるべし
禄あれバ郎従も多く職高くれバ威光も添おのづと人も重んぞる藤吉郎が身の勲高くあるすにいよ〳〵身を謙ぶれども柴田佐久間の歴〻元より藤吉郎を忌嫉むが故にまさく不快の氣色をあらハしぬ抑藤吉郎去年九月織田家に有付し後いまだ一年をも過ざるに功を立ること多く賞を受ること却て稀なりされども藤吉郎いさゝかも功に誇らず一向に忠義を竭さん

ことのゝ朝暮に思ひ信長もすこされバが良将の器量備りて急に賞を重くなさバ益譜代の侍共の嫉妬偏執をさけらるゝが為とあらざりけれども君臣一和乃氣を得く言きられ謀用ひられ今高禄を授け評定の席に列をしむると大勲成就の兆と聞えあり爰に信長ひそかに間者を伊勢に遣し佐屋川合戰乃後の容子を伺せらるに北畠家の諸士先度の軍に手懲して尾張の武勇を恐れ再度兵を發して敗走の耻をきよめんと云義勢いるすく信長を侮るへからバ従ふ武士乃猛烈なることをのことかより合大息續くおるのしをたしかに告しかバ信長大に喜びさそあるべし彼國の輩の我國を切取んと襲い来りしこと幾〻安からず此度ハ此方より勢州へ乱入し臆病神のさめぬうちに切なびけ北畠一家

を滅ぼしその領地を合せて知行させんとて伊勢乱入の支度より外又他事なかりけり

信長勢州發向評議の事
并藤吉郎密に岩倉責を勧る事

織田殿はそでに勢州乃武士の恐怖し居るよしを伺ひありて此勢ひに伊勢の國を切平げ武威を示し領地を取廣げんと思ひ立れしかば諸老臣を召あつめ軍評定有けるに伊勢國の北畠殿の我國を切取んとて軍勢をさしむけられしを近ごろもつて不當なりされども當方の勇士等力を竭して防ぎしかば一戰の内に勝を得て却て彼國の兵士乃肝を寒し今に佐屋川軍のはげしさをそのまゝたとへてかたり恐怖しおる

由たしかにきゝけり此勢をぬかさば此方より押寄なば一支も支ふることあるべからずたゞ一擧に伊勢國を打破りて後の患を除かんとおのおのいかゞおもはるべきと宣へば

流布本此信長の詞なし今一本によりて補ふ

柴田佐久間の家老らも佐屋川にて伊勢武者の剛膽をしれりぬ味方の一人を以て敵五六人に當るべしと謀りあなどりおりに心ありける故信長の國へ切入らんとやされしを御尤の思召にてはなく軍馬の御用意ありて然るべしと勸めしかば信長大きによろこびすでにその座の評定決着して出陣の手分をなさんとせし処へ木下藤吉郎参上せり信長をみなもち伊勢發向のことを申出されしに藤吉郎謹て承なり是なふかきさ以て然るべ

かゝる御軍略にてハ前車の覆る後車の戒といふこゝろにてハ先に北畠どの我國に故もなく亂入さんとなされしへバ此方よりも川だいに向ひて一戦に勝利を得られし之君の思召もまたず威を示しふたゝび我國へ手をかけさせまじきとの御諚にてハ候ひし也然るを今また伊勢國を切取んがために御勢を出されしハ即先度の北畠殿にてハべし伊勢武者ハすでに佐屋川の軍にまけて我國の弓箭に恐怖しハふたゝび我國へ向ふの勢なく候由是當國の災ひをのぞきしものにてハ此隙に國中をかため根をかたくあそばされしかん御謀あるべきことゝ存候にさハなく軍を起して他國へ乱入しぬべき福も變じて災と成りすべくハ伊勢ハ恐もなく謹て護り味方ハ競ふて敵を侮る千に

一も勝を得ることはべし伊勢武者柔弱なりとも此方より押寄て其國を攻取んとせば窮鼠かへつて猫をかむの道理にて北畠一族残盡して要害に立こもりて拒き戦ひはべし是を破らんこと勿くたやすからずしかうして候はんか伊勢ハ國廣く兵多く旗本の内にも智謀の名士も若干はべらんか案内知たる要害によりて奇計を施しなば味方たとひ敗軍まてに及ばずとも數日を費やし務んその際に御敵あらなば起るべし唇ほろびて歯さむし伊勢ハたとひ御手に入はべるとも當國に御敵を得玉はゞその詮更にあるまじく萬一伊勢も御手に入ぬうちに事蕭牆のうちに起らば何の益かはべるべき能く御思案あるべき御事か根本固からずして枝葉いか

ぐり繁昌仕りしぞき此ほどの御國の躰にて他國へ御馬を出されんとあるは以て危き時節なりと憚る処なく申てたり

永禄二年四月の頃美濃國の齋藤左京大夫義龍信長のためには小舅なれども四年以前弘治二年四月父道三と合戦して道三討死ありしかば信長義龍の間むつましからず又三河遠江を隔てて駿河の今川義元海道第一の名家といひ勇将といひ常に尾張國を討平げて上洛せんことを志さるること一朝一夕のことにあらざれば次ぎには甲斐の信玄信濃國を切とり遂に美濃國に手をかけ恵奈土岐の郡迄切取て岩村に軍兵を籠らる

恵奈土岐の郡は尾張の春日井丹羽の郡に隣りて近し是等を敵として他國へ馬を出されんこと危ふきことを説しと實に兵機に熟せりと云べし

一座の評義すでに定まりて諸士出陣の用意取々なる所に藤吉郎遅参して然も一人出陣を拒ぎてよろしからざれと申けれども座中あざけりてみてたりけり柴田佐久間大にいかり藤吉郎の傍若無人今に始ぬことなれど只今の申條以ての外に過言之間者を入置て伊勢の容子を探り知りて今こそ實に打取べき時節なれば斯軍勢催促の評定にも及びし取べきを取ざれば却て天の殃を受くと云ことあり然るにあらば上の思召にて御出馬あるべしと定め給ひしにより

仰に従ひ衆議一決せし処其方一人是を支へ申條心得難し
と居高ごゑになりて罵れば信長大にいかりせまひ新参の
猿冠者さし出口とき〱を毎度なりこれを咎むるに及
ばずとはおもへども諸老臣ゝる我意に従ひ伊勢を取んを
掌の内にありと云處に其方一人さまたげをなすも以の外に
奇怪なり四方ゝる敵國とゝのひながら此節はいづれも我國
へ打入らんとするものなきは兼て謀り知るなかに隙に
伊勢を切したげめて埒あけんとおもふを誤にあらずよし誤
なりとせよかくまで評定一決せしをいまさら何と變ずべき
無益の詞を費すことなかれと散々に氣色を損じて座をたゝれ
しかども藤吉郎すこしも耻る氣色なく仰つぶさに伺ひ知

てはべれども只御足もとに危きことのはゆゑそれを丈夫に
御謀らひはなやと存じて申上るとはゞかりをも時信長
いよ〱怒聲をあげて甚以て奇怪なり再度出陣のこと我
拒むものを無用といひしを推返して足もとの危きを丈夫に
せよなどいふことの無禮なるのみならず我を侮る不敵の言ぶん
ちやく退去すべしふたゝび我前へ出ることなかれと追出されたり
柴田佐久間は傍にゐて日比藤吉郎をにくしとおもひ居たる
ところなれば心地よしとおもひつゝ打笑てぞ居たりけり藤吉
郎は追立られその外すでに出陣を諫むるものなければ明日は
いよ〱伊勢へ打立んとその用意おさめるに皆々御暇給りて
退散せし信長はつく〴〵思案ありけるに藤吉郎が計策いまだ

一つとして中らざることなく志かしも能く反間の術に妙を得しことハかねて知しめしつることなれバ今日の諫も定めて様子こそあるべきに然れバ今度も何か藤吉郎が探り得ることも有べきか足もとの難義といひしをも心にかゝり玉ひしかバ[illegible]所存を聞ばやと思されて藤井又右衛門を召出され夜に入藤吉郎[illegible]めし連来るべしと仰られしほどに又右衛門かしこまり藤吉郎を召具して御前へ出けれバ信長藤吉郎を閑所に伴ひ汝今日老臣等が申すむねを拒て伊勢出馬を止めしとかハ足元の危さとハ何ごとぞや明白に申べしと宣へバ藤吉郎承り諸老臣の申さるゝ所君の御諚もさることなく(?)いへども某つらつら考ふるに當國いまだ平均仕らざれバ暫く君の

御威光によりて治まりぬるに似たりといへども十日も君の御留守になりなバ必定國中に變起り申べし足もとに危きとハこのゆゑと申上しハ山口左馬助父子戸部新左エ門を討しこと全く當方の計策により誤りてしことを知ぬべしさらバいかにもして一方便仕り抜群の働して義元の疑心をとかれ首尾を直し給はんと心掛けるなれバ君の御留守と聞ば忽に駿河へ内通して何ことをか企らんも案の内なりそれハ是非もなきことなりその押へを置せ給ふべきとあるべけれどもそれにつぎて岩倉の伊勢守殿の御跡の侍共謀叛など起しければ今川家と引合て鳴海笠寺智多の郡の者どもと一致して御敵となりぬべしこれらの者ども御留守を伺ひ二方三方より打立バ實にゆゝしき御大事なるべしこと

足もとの危ふき御ことにはなきや是によりて暫く勢州發向の
御調略をとゞめ給ひまづ岩倉を御退治あるべし然してのち
他國へ御馬を出され然るべしと存ず
岩倉と云は尾張丹羽郡にあり清洲より東北に當り三里
餘もあるべし織田備後守信秀の弟津田孫三郎信光の次
男津田四郎三郎信昌（又は信富とも云）の居城なり信昌後に伊勢守と
云信長のためには從弟なれども勘十郎信行と一味して信長
をそむきし人なり
勢州侍は君の御威に恐れてはや捨おかるゝとも再度當國
へ乱入せんなどゝ思ふことはあるまじ先方より手出しはせぬうち
此方より御かまひなく只國内の乱を鎮め玉はんこそ

肝要にこそあらめと述ければ信長げにも最のことなりとて
今日既に勢州乱入の評定決し明日出陣のおきてを出し
たまへば諸士もはやくその用意して今はいまや一番の螺を待
てや居らんずらん然るを輕々しく出陣を止むべきにあらず
大將の命令一度違へば後日ふたゝび用ひがたし此義をば何
とおもふと宣へば藤吉郎笑ひてやさしくこれこそ幸ひ方便の
ゆゑ上意のごとく軍勢催促ありてはや御出陣の支度最中
なればかれを止め給はんと又後の軍令を誤りに似て口惜くは
然ればまづ御出陣ありて佐屋川近くまで打出給ひ揔
勢をまち合せのふりにて御休息ましくして引返
して岩倉へ向はせ玉ひて結句御勝利にはべし彼城中の輩

御出陣のよしを傳承り心おとろへ手配り備等も等閑
なしく油断仕候べしその處へおしよせさせなバ半日とも
たゝへ候こと叶はず一時攻に落城仕るべし岩倉落城仕り
なば丹羽の郡ハ全く御手に入候べし丹羽の郡平均しゆ
れば春日井郡ハもとより御領なり愛智の郡鳴海より
あなたの城々も破竹のごとく降参仕り候べしかくて御心
かけの敵徒滅亡して御威勢いよ〳〵盛になりなバ
老臣たちへも御出馬のみち途中より此義を仰出され然
るべし初より此事御披露候ハゞ岩倉へもれ聞え候べし
謀のもるゝハ軍に功なきもとゐなりと申によりさらバ
その謀に従ふべし但汝を勘氣の躰にて今去だしかく

まく事の様を見るべしと宣ひければ藤吉郎かしこまりいり
ふと御諚のごとく只今ハ御勘當の身となるべしく御免
あらんもいかゞ明日御馬を岩倉へ向させたまふ時御陣中へ
推参仕り柴田佐久間を以て御わびや申べし其時御免
を蒙り候ハゞ老臣諸士の某をふくむこともすこしハ薄く
なり忠義を盡さんたよりよくも候はんとむそかに謀を示し
合て退出を君臣水魚のごとく互に相待て大功を立つるの
時至れる天運の然らしむることゝハ云ながらふしぎなりける
知偶なりその夜ハ信長心よく休息ありて翌日早旦に出
馬の催しありけれバ柴田佐久間丹羽池田坂井森林以下
の諸士それ〳〵労らずとも参集まりしかバ信長ことにハ吉

例なりとて柴田權六郎を以て先陣として其勢都合五千餘騎清洲の城を打立て佐屋川表をさして進發あり清洲の留守には例のごとく織田大隅守信廣なりのこる一族郎徒も勢州發向とのみおもひ居たりしに信長佐屋川のほとり神守村桑の邊に馬をとゞめ給ひて後陣をまち付んが為に休息ありしが諸手は兵士列を正しくして隊伍をたてたりその時信長俄に馬のかしらを立なほし柴田佐久間をちかくめされ伊勢發向と披露せしは敵をたばかる謀にて誠は是より直に岩倉へおし寄まで一時に責落すべし城中にても定めて油斷してあるべしその處へ押かけて責なば大功は立べけれすゝめや兵どもかけよ者どもと眞先にすゝみ給へば柴田佐久間

おどろきながらされば殿の御軍法今にはじめぬ事ながら實にゆゝしき御計略にて候へば是より罷向ひ手柄を御覽に入御感に預らんと侍ども柴田諸軍にふれていそぎ先陣に出發すゝみけれ

是歳柴田勝家は三十三歳身健かに武藝絶倫なりしかば鬼と異名されしそのながらすぐれて木下に指揮をとりて奔走の力を竭せりその優劣もこゝの時より顯れしとぞいふべし信長岩倉を打し計略まで明智が為に本能寺に用ひらる戦國兵家の常ともいふながら爾に出るものは爾に歸るためしにあるか

重修眞書太閤記初編巻之十七　終

重修眞書太閤記初編巻之十八

岩倉城責勝家高名の事
并木下柴田に執成を頼事

尾州丹羽郡岩倉の城と云ハ織田一族伊勢守信昌乃居城なりしが伊勢守信昌ハ去弘治三年の夏織田武蔵守信行の謀叛に與力し信長の敵となりたり然るに武蔵守信行信長と和睦して柴田林も信長へつぐむと言ヤて事済たり

信長の弟武蔵守信行ハ尾州末森の城主なり柴田權六勝家佐久間大學助長谷川宗兵衛山田孫右衛門家老

たり然るに弘治二年林佐渡守信勝の弟美作守并に柴田権六等信行を主君と仰ぎ信長に謀叛さし時信長清洲より打て出稲生に合戦し鎗を以て美作守を突伏たまひしかば信行の軍破れ信行勝家共に剃髪してわび言せしに依て和睦ありしに伊勢守信昌ハ真實に降参の色をあらハさず表ハ和平乃氣色なれども内證ハ武蔵守をすゝめ再度謀叛のくはだて聞えけれバ信行終に信長に謀られて生害し柴田林ハ他によるべき主もなければ清洲に伺候して二心なく随従せり伊勢守今ハ一人身となりつれども猶信長にさからひ岩倉の城に籠りて獨立の勢を示し信長これを平

げんとおもはれしかども一族といひ近親といひかた〴〵時節もあるべしとゆるし置れしに運の極る時にいたれるにや伊勢守病をうけ種々の療養手をつくせどもかなはず忽に館舎を捐られ信長このよしを聞たまひ子息ハ幼弱なり外にたのもしき人もなし さらバ家老とも相談して降参もすべきなりとおもひ居られしに伊勢守の遺言やありけん家老に織田七郎左衛門同孫左衛門山内猪之助などいふものいとけなき主をとりたて家督をつがし城中志を一にまもりし備配り厳重にして更に降参のけしきなく偏に合戦の用意のことなりと聞えければその儀ならバ押寄てふみつぶさんとて信長度々軍を向て責たまへども要害

かくして兵器また澤山なり籠る処の侍どもすくなからぬ勇
烈の壮士なりしかばよく防戦してよわるけしきなく寄
手いつも敗軍に及びけりされどもわづかの一城にて外に
たすけの勢もなければ手痛くあてゝ戦ひなば城をば落し
得なりとも味方また大分に討死なすべし遠巻にして緩く
と責めなば終には落し得べしとてそれよりいくさやめにすて
置きしけるに藤吉郎が計策を用ひ玉ひ伊勢発向と披
露し軍勢を催し兵粮を支度ありしかば岩倉にては我身
の上とはおもひもよらず信長伊勢へ乱入て合戦既に半に
なりなん此清洲へおしかけ大隅守を追落し城を乗取んと手
ならちなありと悦び結句籠城の支度をもなさずして出陣

のためにおのが在所々々へ引籠り伊勢の沙汰を聞んと
油断して酒宴をなすもありその隙に物詣せんと妻子を
引具して神社仏閣へ詣ずるもあり自身の用心は更に
せざりし今やとまつほどに永禄二年五月廿八日の早天に
信長清洲を立たまへば岩倉の城の大将なる織田七郎左衛門
山内猪之助大によろこび信長清洲を打立たまふ勢は五千
たしかにきく然らば残る兵は多からずそのうへ大隅守信賢
さばかりに安き侍なり明日にも人数を催しそて四五日
内に清洲へ発向し城を責落し入替りなば信長たとひ伊
より引返すとも勢州佐屋川のあたりに出して防ぎ止んにか
ちかゞと畑水練の青葉武者ちからべに評定しておのがどち

休息しけるその処へ信長五千の人数にて佐屋川より引返し
しのびやかにて岩倉へ押寄らる先陣ハ柴田権六郎勝家
七百餘騎岩倉ちかくなるや否鉄炮を打かけ烟の下より鎗を
入短兵急に攻立る城中の輩おもひよらざる不意なりければ
如何すと驚きさわぎ弓よ鑓よとうろたへ廻り城中鼎の
ごとくわきかへり騒動を織田七郎左衛門同孫右衛門山内猪之助
されば聞ゆる名誉の勇士なれバすこしもさわがず物具して
手勢の兵ともに下知し弓鉄炮の備を立なほし散々に射出し打
出しおのを先途と戦ひけり去ども寄手は大勢なるをもて
せばめ入替て只一時に攻落さんと揉立ける城の兵三千餘騎
なのに劣るべき勢にハあらねども事急にして油断をし

最中なればものゝ用に立べき侍ハ少く足手まとひなるもの
の多かりしかバ斯てハかなふまじとて七郎左衛門我
手の従者五百余人を呼近づけ某打出て一戦をなしその
間に遁ら城中をとりかためよ一手たしかに定まりなバ自
余の兵士もおのづから踏止りて持場々々を固むべしところ
あれや侍ども命をすてよ殿原といひ捨て木戸をおし
開きまつしぐらに打て出うけまく如き清洲勢の真中へ
面もふらず切入けり寄手の先陣柴田権六郎これをむかへて
もみにもむや岩倉の七郎左衛門ござんなれ是を打取付入にせよや
とのどもと士卒をいさめて駈ければ七郎左衛門も権六
郎も互に知人なれバ日頃のよしみをわすれざりけん柴田が七百

餘騎七郎左衛門が五百余騎を中に取こめて討んとすれば七郎
左衛門ハ小勢なれども今日を限りと思ひ切討ごとを突ども
きのうきとせず右にかけれ左にかけて責つかひ手の下に
敵多く討取あるりをえらふて戦へば柴田が勢あまりといへども
彼一人に切立られしどろに成て引退く七郎左衛門得たりと
かしこしと輪寶の山を崩すがごとき勢ひにて立られば
寄手ほうほう責あぐんで見えたりしが柴田これをみてきく
なき味方のふるまひかないで某が一軍して汝等が為なり
をさばきべしといひながら鎗をおしとりて七郎左衛門にかゝ
り合ひめげらしや今日の見参尋常の勝負して日ごろの
よしみをとらすべしと莞尓と笑て立むかへば七郎左衛門も

おそず心に馬の頭を立なほしこの日比さとしくかなし権
六郎まくるゝなよくせよと詞をかけて戦ひたり
柴田と織田七郎左衛門との戦場ハ岩倉より西南に當る
河井といふ処にて七郎左衛門柴田に聲かけられ負るな
権六といひしなく此勝負なや権六郎の勝なるべしと
いひしと總見寺の大龍禪師の語られしと云ことを何の
書に出るといふこと残されし野人の語ありしをここに記し
七郎左衛門ハ岩倉の侍大将にて名ある聞ある勇士之柴田も
かうき鬼と呼なれし程のものなればるふたちまちもためらふ
ゆゑ命かぎりと責つけたり
織田七郎左衛門の母ハ尾張愛智郡上社村の人にして柴田

権六郎の母と姉妹なり柴田また上社村西島といふ処に生まれて幼なりし比ハ七郎左衛門と同じ在所に生育たりとなり
織田も今朝より長途に馳られ數度の合戰に草臥れども柴田よりハまさるかに年もまさりつれバ半時計りも合うちにいつしか腕もゆるみ力おとろへ受身になりて見ゆる処を權六郎すかさず進みて突くれバ七郎左衛門馬にたまらずどうと落權六郎馬より飛で下りて七郎左衛門とむずと組ならくハ揉ぞ合ひしが織田ハ手負たり然も疲れぬ權六郎終に組伏て押へて首を掻りけり七郎左衛門討れてのち城方の兵士右往左往に敗走し見ざりしかりけるその内に七郎左エ門が手の者ども能戰ひて三百餘人ぞ討死を岩倉の織田七郎左衛門從卒戰死の塚あり今に至り其の士を養ふ徳乃いまもるを残せり傳ふ
此勢引續ひて攻よせしかバ岩倉只一擧にのり取べかりしかども柴田も大に疲れつれバ付入の力もなくて息はらし居たりけり
柴田織田と母方に付て從弟なりしかも幼稚よりの親もありつれバ自然となれもなひしなるべし
信長此よしを聞玉ひ森三左衛門池田勝三郎を大將として一千五百の兵を引まけて先手に進ましむ柴田大によろこび七郎左衛門が首を森池田に示し本陣さして

引かへして信長権六郎を近くめされ今朝よりの合戦すきは
かく先手の兵士よくせしのみならず自身の戦ひ力を竭し
あまつさへ敵の大将七郎左衛門を討取し條比類なき手柄
なりと褒たまひさすが鬼柴田の名を秉しものなりと頻りに
歎賞ありけれバ柴田も氣色ばみて居たりけり森池田ハ
柴田に代りて岩倉におし寄責ゐるに城中の手配り厳
重にして防戦の術をきはめし寄手ハ大将の七郎左衛門
討死し城方力を落しながら敷戦ハあるべからずとおもひ
しに城中なをしその色とも見せず持口々をよく固めて
究竟の勇士箭ども筒先をそろへて防ぎしかバ寄手攻
あぐんで見えたりなりしも五月下旬の事なれバ炎熱甚

しく甲冑にも焦まで進みかねたり信長此よしを見
玉ひ使を立て森池田に宣ふやう日中ハまづ引退き仕
寄りゝを固めて休息し夕暮かけて一時責に責破るべし
と下知せられしかばおのおの虎口を引退けり
革小札の鎧を炎天に着て焦るゝとなし此比鉄胴さん
に行なはれしかば先手の兵士ハ云に及ばず侍までも多く
用ゐるにいたる故に炎熱乃時焦爛のうれひあり依て下
着に澁染を用ゆるといへり
爰に木下藤吉郎ハ軍評定の席にて過言しつるより
信長の勘氣をうけ御前を遠ざけられしが今日乃軍に
従ふことかなはざりし此ハ表むきなりけるにして内證ハ

大将と示し合せしを知らず藤吉郎たゞ一人むかう
大将の本陣に来り林佐渡守の陣中に入り對面をこふ
佐渡守よび入れて對面し何ごとぞと問に藤吉郎がいはく
某誤りて殿に過言し御勘氣を蒙りしかば後悔すれども甲斐
なし抑それがし新参なりしに忽ちに高禄を賜り諸士一列の身
となるこれ全く君の厚恩なり此厚恩に酬んためには一命
を戦場に棄んとおもへども斯る身なれば御先をかくることも
罷ならず腸は千々に断るとも為べき様なしされば君乃
御取なしにより今日戦場の御免を蒙り討死して殿の
御恩を報じ度こそゆくと涙をながしてかきくどけば林も哀
とおもひなどや柴田佐久間を頼まるゝかとて藤吉郎

さんは柴田どのを今日の勲功比類なきよし承られば何ごと
の所望も此人よりかさば叶ふべしと存じ付てゆくなりとも
元来柴田どのゝ意に違ひし某なれば直に柴田どのゝ陣へ
参向ならずかり入てゆえは君にまづ申ふせといふ佐渡守いはく
藤吉郎が詞をあはれみ御邊の願ひ尤なりいざさらば柴田を
今日の武功といひ御前の首尾よければ勝家取なし申さば
などかは御免なかるべきたゞし柴田も佐久間も御邊をも中
あしく出さぎるのよしのゝしり居れば得心をぞすゝやいなや
はかりも計りがたし一先某柴田が陣に参向し頼みて見べし
とて佐渡守藤吉郎を伴ひ柴田が陣處にいたり藤吉郎
が申せし詞をかたり一向君の扶助を蒙り今日の軍に討死し

日比の恩を謝し再度と思ひ切てたのむよしをつげければ
元より藤吉郎さしでゝ口をきくこそ君にあるよ忠
なれども不忠なるべし老臣をもおもんぜず
おのれが心にまかせて口をきくことのみくせのものは
さのみ悪からねど大きなる事もあれば今度の御勘當に
およびしてこのゝち過言をいましむるの詞に相違すべし
まる彼が心根もかはゆしいかゞ計らひあるべきやと柴田どのと
いへれば勝家うち笑ひ林どのゝ宣ふごとく我とても藤吉
郎に何の深き意趣もなし只時よのごとく我等をおしのけ
口きくが悪きのみこのゝち謹まんとならば詫言をも申て
見んと申により佐渡守藤吉郎を呼出し柴田が前に伴ひ

出ければ藤吉郎さも恐怖のけしきにて權六郎が前にひざまづ
きかしこまりてぞ居たりける權六郎藤吉郎にむかひいふやう
藤吉郎口を禍のもとゝ云ことを今こそおもひ知つらめ前にも
ことをたがひて今は諸士の列にて評定の席に出る身なり
老臣たちの順次もまたず心のまゝに振舞ふこと傍若無人と
いひつべしこのゝちはよく謹てみだりに言をなされといへば
藤吉郎赤面し御家老の教訓骨髄に入ておぼえはべり
命生てゐたる程は御恩を存ずべし討死仕りなば草葉のかげ
より護りたてまつるべしと涙とともにかたりければ鬼柴田も
そゞろにあはれにおぼえさればこそ御ゆるしありと藤吉郎を
引具し信長の御前へぞ出たりける

此一條清洲より稲葉へ赴く道すてある老人の口碑ふきく老人ハ林佐渡守がのちふくこの時藤吉郎より佐渡守によりて柴田よ送りし起請文の案ありといへりしが事繁くして寫しのこしつ他日これを得てあらはすべし

藤吉郎柴田よ密計を示す事
并堀尾忠左衛門父子勇猛の事

柴田權六郎勝家木下藤吉郎を伴ひ信長の御前ふまう出權六郎謹てやう藤吉郎事先日軍評定乃席よ於て過言仕り御勘當を蒙りしを後悔仕り恐を入てゐいしに君の御出馬と承りもそや伊勢へ御出陣と存ぜしふるゝ

岩倉へ向わせあふと何様神變ふしぎの我君の御軍ゆゑく藤吉郎肺肝よ熱湯を沃ぐごとく驚き入てゐたりし日比も御陣の度ごとに御先がけ命のきはよ働らきてゐひしが今般御勘當の身なり御免なくして御旗ふ先だちゐさんを近比以て憚入てゐへバ某が陣に来り一向よ御ゆるしひやて御先手よむかひゐさんこと御免ゐへと思入て願ひゐこの不敏ゐ恐ながら言上仕るふてゐ藤吉郎が前々の功ふ御宥免ありて先陣ふ加へるやう御ゆるしいるべきよやとゆきてれバ信長きゝて猿め辨舌さらとやうあしく人の詞乃腰をきり諸士の心を迷わすをの奇怪あれバ去りかしさだやと私のを折ふし我軍のちをけえしきめくよ過言せし故勘當しつまでも今日第一乃

勲功なる其方の面にめんじ免しがたきをも免し遣はすべけれども
猿は性こりなきものゆゑ此のち能くつゝしむべきや否をたゞし
ふきゝてのちと思ひしなれども汝が先手に加はり勲功
あらはれたるとぞきくにより柴田藤吉郎が仰を
傳へて御前を退きさがりしてたゞちに藤吉郎いさめや
木下と勧めしかば藤吉郎大に悦び實に柴田どのゝ御芳志
より今日戰場へ出ることを得たり戰場の土となるとも此恩を
忘れじと柴田をふし拜みて先手の兵に加はりけるに柴田に
やゝう某存付たる計略あり某に足軽五百人かし玉はれと云
柴田聞ていかなる術ぞと問ば藤吉郎柴田が耳に口をよせて斯
なしかくなさばたちまちに城を落さん又は城にこもるものどもを

降参させるかさなければ一列にかゝるべしと申けるにより
柴田げにもとおもひ信長の陣へ参向し岩倉の後乃山にのぼ
りて一つの計策あり足軽少くかさせ玉へと申ければ信長すみ
やかに足軽をつけて柴田に下知ありけるまゝ
岩倉山と云ふ城より西南にある此上にいにしへ藤吉郎の
柴薪を焼し所と云ありとある或は此上古烽の跡なるべしと
いへり正しくその跡ところみえたるにもあらねども藤
吉郎の計策をもしと偽りていふならじとおもはる
柴田此足軽どもを引つけて藤吉郎に渡せば藤吉郎よろこび
件の五百人と共に岩倉山によぢのぼり時刻をまちてぞ居た
たり然るに岩倉の城中より堀尾忠左衛門父子切て出で

柴田森池田が大勢と追りまくりつ戦ふなり然るに忠左エ門
と嫡子仁王丸と大勢にかこまれ父子別々に戦ふなれども子は
父を思ひ父は子を慕ひ互に先途を見とゞけんと一まちもせん
潮のごとき大勢を前後左右に引うけて打あひ切あふ
ありさまはよそにめざましく見えたりけり中にも仁王丸は
十六歳大わらはの姿にて右に突左に切東西にはせ南北に
破り阿修羅王のあばるゝごとく戦ふなり敵は多勢なれ共
只一人の小人に切立られすでに敗北の色をあらはしたるを木下
ちかくに見られあつぱれ勇士なる如何なる者ぞ名のるべし
と大音に呼はれけれバ堀尾忠左衛門吉久の一子なる仁王丸と申す
しかば木下大に歎息しよき侍なる我手の者となさるべし

うしなはんとはなつ処きしとき
堀尾仁王丸吉晴は尾州愛智郡御器所村の人也父を
中務少輔吉久といふ國人三十六人の内なり此年十六歳
なり岩倉軍の前夜に軍して首一ツ得たりしが又仁
王丸が手にて捕得べき敵にあらざればといはれしとなり
然るに岩倉軍に能戦ひて木下に名を知られしよりさては
前夜の首も實に打得しならんと人信を取しとぞ
たゞし印本太閤記には岩倉軍の時仁王丸馬より下立
てありしを叔父の堀尾修理亮なるもとて退かざるぞ急
ぎ退きゆへとありし小郎等なりける山田小一郎、かけ
參らんばかへそれを待えくめしつゝも退処しとせし

よしを記せり

重修眞書太閤記初編巻之十八終